

平成28年度

全国中学生人権作文コンテスト東京都大会入賞作品集

東京法務局と東京都人権擁護委員連合会は、次代を担う多くの中学生に人権問題に関する作文を書くことを通じ、互いの人権を尊重することの大切さについて理解を深め、豊かな人権感覚を身に付けてもらうことを目的として、昭和47年度から、都内の中学生を対象とした人権作文コンテストを実施してまいりました。また、昭和56年度からは、法務省及び全国人権擁護委員連合会が主催する「全国中学生人権作文コンテスト」が実施されることとなり、毎年、数多くの作品が寄せられています。

本年度においても、東京新聞と共催し、東京都教育委員会、一般財団法人東京私立中学高等学校協会、TBSラジオ、公益財団法人人権擁護協力会の後援をいただいて東京都大会を実施しましたところ、前回よりも7校上回る、都内318校の中学校と外国人学校から、4万6263編に上る作品が寄せられました。

本作文集では、入賞作品の中から10編を紹介させていただきました。いずれも中学生らしい純粋な感覚で人権課題をとらえた作品です。より多くの方々にお読みいただき、人権尊重思想の普及高揚が図られることを願っております。

終わりに、本年度の東京都大会実施に当たり、熱意をもって応募された中学生の皆さんを始め、多大な御理解と御協力を賜りました各中学校、外国人学校、東京都教育委員会、一般財団法人東京私立中学高等学校協会、TBSラジオ、公益財団法人人権擁護協力会、東京都教育庁、各市区町村教育委員会、各市区町村人権擁護事務担当者の皆様方、共催いただいた東京新聞に、厚く御礼申し上げます。

平成28年11月

東京法務局

東京都人権擁護委員連合会

目 次

【入賞作文】

最優秀賞（東京法務局長賞）

互いに尊重し合う大切さ

立川市立立川第七中学校

三年

えいそもえか
永曾萌果

最優秀賞（東京都人権擁護委員連合会長賞）

生きる権利

世田谷区立世田谷中学校

三年

いしい ゆづき
石井悠月

最優秀賞（東京新聞賞）

私を生きる

新宿区立四谷中学校

三年

うえだりんこ
上田倫子

優秀賞

「障がい者の部」万歳！！

八王子市立加住中学校

一年

せと しゅういち
瀬戸秀一

心を穏やかにして人権を守る

多摩市立多摩中学校

三年

のぐちまある
野口真亜瑠

人とのかかわり

府中市立府中第三中学校

二年

ますやまかのん
増山花音

誰にだってあること

国分寺市立第四中学校

二年

ながおすずか
長尾涼花

不完全で当たり前

おおさわ学園三鷹市立第七中学校

二年

やましたかりん
山下果倫

知らずに生まれる「差別」

西東京市立田無第三中学校

三年

すみやしきえさと
角屋敷絵里

よりよい社会になるために

青梅市立第一中学校

一年

よしだかのん
吉田佳暖

最優秀賞 （東京法務局長賞）

互いに尊重し合う大切さ

立川市立立川第七中学校 三年

えいそ もえか
永曾 萌果

「ウィ ミス ユー。」何人もの友達に囲まれ、声を掛けられ、「ミー トゥー。」と声を詰まらせながら応えた。飛行機の中でも、心の中で「ありがとう、ありがとう。」とつぶやき、私は成田空港に降り立った。そして、私の海外生活は終わった。

私は父の赴任先のタイのチェンマイで、インターナショナルスクールに通っていた。全校生徒の中で、日本人はわずか5人。生徒は各々が違う国からやってきて、違う文化を背負い、常識も全く違っていたため、トラブルが起こるのが当たり前前の毎日だった。

「それぞれの文化を尊重していきましょう」と、言うだけなら簡単だ。しかし、実際には、非常に難しかった。日本で信じていたことが、ことごとく否定された。今ま

で信じていたことを否定されることは、自分の国「日本」を否定されたことに等しく、辛く、悲しかった。

「日本人ってさあ。」と、聞こえよがしに言われたこともあった。学校の中での共通語の英語ではなく、それぞれの国の言葉で、こちらにはわからないと思って日本人を否定されたこともあった。私の行動は、日本人の象徴と捉えられ、私が失敗すれば、日本の国を低く見られてしまうと考えると、私は怖かった。今までの自分を捨てて、アメリカ式に慣れよう、大勢を占める中国人や韓国人、タイ人の文化を真似ていこうと、かなりの無理をしたこともあった。しかし、自分が自分でなくなるような感覚に陥るだけで、全くうまくいかず、自信を失いかけていた。

そんな悩みを抱えているときに、母から「日本人としてのアイデンティティーを大事にしていればいいんだよ。」というアドバイスをされた。「自分が日本人であることに誇りをもち、他の国の人に無理に合わせずに、日本人らしく、自分らしく生きていけばいい。」と。私

はそのとき、なるほどと思った。「郷に入れば郷に従え。」という言葉もあるが、バランスを考え、全てを周りに合わせる必要はないのだと思った。

日本人としてのアイデンティティーを大切にしていこうと決めたとたん、私の心は軽くなった。そして、他の国から来た生徒や、現地の生徒に日本のよさを知ってもらい、日本を認めてもらおうと決心した。

日本人のよさ、私のよさ、それを全面に押し出していこう。そのかわり、他の国の文化も大切にしていこう。なぜなら、その国の人たちが大切に思っている文化だからだ。

そうと決めたら、すぐに行動に移そうと決め、できることから実践していった。まずは、体格が小さいことで軽く見られてしまうことを克服しようと思った。そこで、小回りのきくことを示して、体格が小さくても、スポーツができることを示そうと思った。

日本で言う部活のようなもので、アクティビティーと呼ばれる活動があり、私はあえてスポーツアクティビテ

イーを選んだ。大好きなバスケットボールに、チーム一小さな体で参加した。

ある日のこと、インターナショナルスクールの対抗戦で、強豪チームに当たった。恵まれた体格でどんどん攻められ、こちらのチームはわずか二本のシュートしか決められず、大差で負けてしまった。しかし、そのわずか二本のシュートは、小さな体を生かし、大きな選手たちの間を縫って私がゴールを決めたものだった。「モエカ、ナイスシュート。」と、皆から声をかけてもらった。その日から、周りの私を見る目が変わった。体が小さくても、食べ物、言葉、文字…いろいろなことが違って、一人一人によさがある。「少数派日本人」として、周りに合わせようとしていた私から、自分らしく行動できる私へと変わった。

それからの私は、他の人たちにとって「あまり知らない日本」を知ってもらおうと考えた。インターナショナルデーでは、日本人の生徒に声をかけ、浴衣を着て、皆の前で踊った。日本の民族衣装くらい、自分一人で着ら

れないと恥ずかしいと思い、母から着付を習い、一人で着物を着られるようになった。私は「日本の文化を知ってください。素晴らしい国でしょう。」そんな思いでいっぱいだった。

日本のよさを皆に知ってもらえたら、他の国のよさを知りたくなった。アメリカも、ヨーロッパも、アジアも、知れば知るほど、それぞれによさがあった。異文化交流のイベントの意義が分かり、自分がインターナショナルスクールで学ぶ価値も分かった。

今後、世界は情報や交通の発達により、他国と一層密接な関係を築かなくてはならなくなる。そのためには、地球に生きる人間は、自分に誇りをもち、相手を尊重できることが必要不可欠である。公平・公正・平等な世界であるために、他者への偏見を捨て、自分を肯定し、相手のことも認め、自国文化も異文化も、どちらも大切にしていくことが、世界の平和を築き、人類の幸福につながり、全人類の人権を尊重することだと、私は考える。

最優秀賞 (東京都人権擁護委員連合会長賞)

生きる権利

世田谷区立世田谷中学校 三年

いしい ゆづき
石井 悠月

私の祖父は昨年の8月に72歳で亡くなった。死因は、悪性リンパ腫というガンだった。

祖父の場合、うつ病を20年近く患っており最後は、意思疎通が上手くすることができない上、排泄や食事も自分一人ではできず、一日中寝たきりだった。そんな祖父の世話を祖母が一人でしていた。

私達家族は、東京から祖父がいる埼玉まで電車で2時間かけて時々様子を見に行っていた。会う度に弱っていく祖父を見るのはとても辛かった。うつ病も重くなり、人であって人でなくなる様子を目の当たりにした。

祖父はガンを発症して初めて医者に見てもらった時、症状の進行度は4段階のうちで最悪である4だった。そのことを医者は本人にあっさりと伝えていた。私はそのことにとっても驚いた。また、自分はガンだ、と知らされ

た時、どんなに悲しかったのだろうか、と思った。

しかし、それには理由があることを知った。祖父はすでに余命が残されておらず、治療方法の選択をさせるためだったのだ。それは延命治療をするか、痛みだけを取り除く緩和ケアのどちらかだった。

祖父は始めから、延命治療を望んではいなかった。しかし、祖母の強い希望で抗ガン剤治療をすることになった。入院し治療するが、祖父は看護師の言う事を聞かず、病院に対して協力的ではなかった。家族は祖父に対して苛立ちが募り、険悪になった。祖母と母も会う度にケンカをしていた。

とうとう、医者から家族が呼びだされた。治療に協力的でないので医者としてどうすることもできない。そこで延命を望む家族の気持ちもわかるが、本人の希望を受けいれてはどうかと提案された。母は

「それは祖父が死を望んでいるということでしょうか。」と医者に尋ねた。返事は、

「考え方のちがいです、延命治療をしてもあまり意味

のないことだと悟ったとき、その選択をすることは自殺ではありません。それも『生きる権利』なのです。」
と言われた。その時、祖母は納得しなかった。

本人はというと、うつ病のため話しかけても反応が薄い。意思さえも確認することが難しかったが、祖父に治療をやめて家で過ごすことを提案したところ、強くうなずいた。祖母はしぶしぶ納得した。私はその時「家族の思い」と「本人の思い」が必ずしも一致することはないと知った。そして人は個人として生まれ、一番近い存在である家族でも、「生きる権利」はその人の意思を尊重しなければいけないと思った。

それから毎日自宅に看護師さんと週に一度医者が来てくれた。お風呂はデイサービスの方が入れてくれた。それでも、祖母の負担は、想像を絶するものだった。私はこんな日々を送って幸せなのだろうか、と疑問を持っていた。

ある日、私達が祖父が寝ている場所から少し離れた場所で夕食を食べていると、祖父がこちらを見て小さな声

で、

「そっちでみんなと一緒に食事をしたい。」

と言った。私達は皆驚いた。すでに流道食になっていて点滴で命を繋いでいたし、第一、意識がもうろうとしていたからだ。母は、

「ごめんね。もう一緒にごはんが食べられないんだよ。」と泣いていた。その時、私はハッとしました。

「おじいちゃんは最後まで人間らしく生きてきたかったのだ。そして大好きな人達と一緒に食事をすることはおじいちゃんにとっての『生きている』という証明だったのだ。」と。

私達はその日帰らないといけなかった。帰る際に祖父と握手した。思ったより力強く、手が痛いくらいだった。私は、祖父なりに一生懸命生きているのだと改めて気づかされた。

その一週間後、祖父は亡くなった。残念ながら看取ることができなかった。自宅で祖母の前で苦しむことなくこの世を去ったそうだ。本人はどう思っていたか、正直

わからない。ただ、延命治療は拒否したがみんなに感謝していたんだと思う。祖父にとって、少しでも長く生きるための治療より、これで良かったのだろう。自分がどう死ぬかは、自分がどう生きるかに繋がっていると思うからだ。

これまでのことを通して少し、人権について身をもって体験したと思う。

「人権」は私たちの身のまわりに存在するもので誰もが人間らしく生きる権利だと感じた。

最優秀賞（東京新聞賞）

私を生きる

新宿区立四谷中学校 三年

うえだ りんこ
上田 倫子

7. 6パーセント。この数字を聞いてあなたは何を想像するだろうか。これは日本の人口の左利きの人やAB型の人割合にもほぼ一致する数字だそう。しかし、今から話そうとしていることは決してそのようなことではない。実はこの数字は、ある団体が調査した日本のレズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーなどの性的少数者の割合なのだ。この数字を多いと捉えるか少ないと捉えるかは人それぞれだが、私はとても多いように感じる。私の周りだけでも左利きの人やAB型の人は何人もいる。それを性的少数者の人数に置き換えて考えてみると、性的少数者は、認識されていないだけでかなりの数がある、ということがわかるだろう。

ここ最近、メディアでのオネエブームやジェンダーフリーの風潮によって、性的少数者とそうでない人との壁

は徐々に低くなりつつあるようだ。しかし、抱き合って
じゃれる同性どうしの友だちを見て、同級生が
「おまえらホモかよ。」

というような発言をしたり、女っぽい話し方やしぐさが
目立つ男子を笑ったりするということはまだ見られる。
このような時、私は非常に残念な気持ちになる。それら
の言動には、無意識であれ性的少数者を差別する心が表
れていることを感じてしまうからだ。

私は生まれてきたときに女性という性を受けた。しか
し、物心ついたときから、常に男女どちらの性でもいた
い、という気持ちを持っている。フリルやリボンのつい
た女の子らしい物があまり好きではなく、スカートを履
くということも恥ずかしかった。小学生の頃は、クラス
の男の子のように一人称が「俺」だった頃もあった。し
かし、成長するにつれて周りの女の子の友だちが綺麗に、
おしゃれになっていくのを見て、自分が女という性で生
まれてきたことへの喜びも感じられるようになった。そ
して、いつしか自分の心の中に男性のようにも女性のよ

うにもありたいという二つの思いが存在するようになった。そのことを自覚したとき、目の前の霧がぱっと晴れたような気持ちになったことを鮮明に記憶している。それと同時に、「どうしよう」という不安と戸惑いの気持ちが芽生えた。「自分はおかしい人間なのだろうか」という問いが頭の中をぐるぐると回った。このことを打ち明けてしまったら、両親、祖父母、親戚、親しい友だち、全ての人々が私と今までのように接してくれなくなるかもしれない、と一瞬恐ろしくなったのだ。

私がこのような不安と戸惑いの気持ちを抱いたのは、人間は誰でも自分とは違うものを否定したくなる性質を持っていると私自身が考えているからだ。そのような性質は性的少数者だけではなく、有色人種、障がい者、在日外国人などへの差別意識にも通じていると思う。ではなぜ、そのような差別意識が育ってきてしまうのだろうか。私は、原因は家族環境や幼い頃の経験にあるのではないかと考えた。人間の成長していく過程で幼少期は、保護者や身近な人の影響を受けやすい時期だ。そういつ

た時期に家庭内や学校などでの会話や雰囲気の間々に差別意識が存在すると、その情報を一気に吸収し、自分の考えの一部となってしまうのではないだろうか。

今の私には、自分の性の認識への恥ずかしさは全くない。それはきっと、私の育ってきた環境や様々なものとの出会いが影響している。思えば私は小さい頃から両親を通じて多様な人との出会いがあった。その中には数人の同性愛者の男性もいて、いつもありのままに堂々と生きるその姿を私はとても美しいと感じた。また、私の大好きな女性ミュージシャンは両性愛者だ。彼女は自身の曲や生き方などを通して人と違うことは誇りに思うべき個性なのだと教えてくれた。その他にも、本やインターネットから知り得た性的少数者についてのことなど、すべてが私に「身体は女でも心は両性」という性のあり方を「一つの個性」という風に思わせてくれた。

昨年11月には、渋谷区で同性カップルに同性パートナーシップ証明書を発行するという制度が作られた。これにより同性愛者だけでなく様々な性的少数者に対する

社会の理解が深まっていくだろう。しかし、差別意識というものを完全になくすのは実際にはかなり難しいことだと思う。かく言う私も「あなたは今、差別意識を全く持っていないのか。」と問われるとすぐに「はい。」とは答えられない。だがこの多様な世界を生きてゆく中で私たちには、自分の思う「普通」が世間の「常識」なのだという考えを捨て、新たな視点を持つことのできる柔軟な姿勢が求められるのではないだろうか。そして人を性別や見た目で判断せず、その人の持つ「その人らしさ」を一つの「個性」として、受け入れることのできる世の中になってほしいと思う。どんな個性を持っていたとしても、その人は「かけがえのない人」に変わりはないのだから。

優秀賞

「障がい者の部」万歳！！

八王子市立加住中学校 一年

せ と しゅういち
瀬戸 秀一

2016年7月17日。

少林寺拳法東京都大会が開催された。

全ての演武が終わり、結果発表の時が来た。

加住小中学校の小学部は、組演武や団体演武で全員が入賞を果たした。

中学部は組演武で男女共に入賞を果たした。女子団体演武は2位だった。

そして、僕が出場した部の発表の時が来た。

「『障がい者の部』、加住中学校！」

はじめに僕たちの学校名が呼ばれた。

第一位だった。僕は心の中で叫んでいた。

「やったー！ 全国大会だー」

昨年の東京都大会に初めて「障がい者の部」で出場した。単独演武だった。今年は、顧問の先生の勧めで、コ

一チと先輩、友人からなる六人組の団体で「障がい者の部」にエントリーした。僕はとてもうれしかった。

僕には生まれつき、両下肢に麻ひの症状が残っている。右腕のとう骨と右手の第一指が欠損している。

1才のころからリハビリを始め、歩き始めたのが3歳のころだったと聞いている。左右のバランスをとることが難しく、靴型装具をはいて、よく転んでいた。

体を思うように動かすことができず、「体育」は好きではない。

こんな僕だが、昨年5月、小学6年生の時に少林寺拳法部に入部した。

僕が通う加住小中学校は小中一貫校で、小学5年生から中学3年生までいっしょに部活動を行っている。

僕の入部動機は「何があっても負けない自分をつくる」。強い心を育てたかったからだ。

しかし入部後、蹴りや突きなどがうまくできず、昇級試験の前日は眠れない夜もあった。

そのような中でも、今日まで続けてこられたのは、信

頼できる先生と素晴らしい先輩と良き友人のおかげだ。

今回の団体での出場の話聞いた母は複雑な思いだったという。

障がいのない人が障がい者の部に出場することに抵抗があるのではないかと心配したそう。そして、いっしょにエントリーしてくれたコーチの先生と友人のお母さんに「障がい者の部に出場するということによろしいのでしょうか」と尋ねたそう。

「なぜそんなふうに思ったのか」僕は母に聞いてみた。すると母は、「秀一が小学3年生の時のマラソン大会で男子ではなく女子の中で走ったことがあったでしょ。次元が違うけど、それと同じようなことなんだよ」と、言った。

さらに母は顧問の先生に「障がい者の部で出場するという事に抵抗などはないのでしょうか」と聞いたそう。嫌な思いをしている人がいたら、申し訳ないと思ったそう。

すると先生は「そんなことを思っている人は誰もいま

せん」ときっぱり言ってくれたそうさ。

障がい者の部で1位をいただいたことを病院の医師や作業療法士の方に報告すると「頑張れば何でもできると証明してくれたんだね」と、喜んでくれた。

僕の演武を観ながら、母は泣いた。

成績発表の時、父も泣いていた。

そして、両親は「瀬戸秀一 不撓不屈」と銀糸で刺しゅうされた緑帯を僕に贈ってくれた。

不撓不屈とは「まがらず、屈せず」ということだ。

最近、気づいたことがある。

日本では、僕の右手に気づくと少しびっくりしたような顔をするが、黙って通り過ぎる人が多いのだが、韓国では、「どうしたの……」と言いながら、僕を抱きしめてくれたりする。

どちらも僕を気づかってくれているのかもしれない。一方で、僕がこれから高校、大学を経て、社会人になってからも、理解・無理解に出会うだろう。無理解とのたたかいは、きっと一生続くだろう。だから、「不撓不屈」

が大切なのだ。

たくさんの人に支えられて、今の僕がある。

だからいつの日か、みんなに恩返しできる人になって
いたい。

「不撓不屈」という言葉の他に、僕にはもう一つ大切
にしている言葉がある。

それは、僕がまだ小さかったころ、母がくり返し教え
てくれた、金子みすゞの詩の一文である。けっして人と
比べることなく、僕らしく生きてほしいとの、母の願い
があふれていると思う。

「みんなちがって、みんないい。」

※「みんなちがって、みんないい。」は、

金子みすゞの「私と小鳥と鈴と」の一節です。

優秀賞

心を穏やかにして人権を守る

多摩市立多摩中学校 三年

のぐち まある
野口 真亜瑠

今年の4月、母が事故にあい、入院しました。脳を損傷したため、左側頭葉の細胞が破壊され、言語と記憶力がなくなってしまいました。肩甲骨の粉碎骨折で右手を動かすことができず、右耳の三半規管が壊れたため、難聴となり、さらに歩き始めのバランスがとれず、ふらついてしまうようでした。

事故にあう前の母は話し好きでよく笑ったり、人一倍元気で陸上部の私と走ったりして楽しい日々を過ごしていましたが、障害を負ってしまった事で、もう以前のようには楽しく暮らすことは出来ないのではないかと不安になりました。

しかし、リハビリに毎日取り組んだ母は、私がお見舞いに行くたびに回復していき、会話も出来るようになりました。母は私と話すことによって、言葉や記憶を思い

出したようです。その時私はできるだけお見舞いに行つて、母と会話しようと思いました。

やっと、母に外泊許可が下りました。でも、一人では歩けません。そこで、お迎えに行つて、一緒に歩くのが私の役目となりました。久しぶりに台所に立った母は料理も難しいようでした。記憶がないので作り方がわからない母のために、レシピを検索したり、お手伝いをしたりしました。母が作ってくれた手料理は、うまいまずいではなく、一緒に食べたということがうれしく、「おいしいね。」と言うと、母はとっても嬉しそうに「じゃあ、また作るね。」と言いました。洗濯物を干すのも大変そうでした。「私がやるよ。」と声をかけましたが、母は「リハビリになるから。」と言って、ゆっくりと干していました。私は、障害者のお手伝いをするのが良いことだと思っていましたが、全てを手伝うのではなく、できるようになるために、本人の希望を聞いたり、本人に喜んでもらったりすることが大切だと気付きました。漢字が読めなくなってしまった母と一緒に漢字の勉強もしま

した。その時も、ただ教えるのではなく、ヒントを言って、楽しみながら勉強しました。

そして、待ちに待った退院の日が来ました。しかし、ここからが母にとっては苦難の連続だったそうです。携帯電話の契約の変更をしに一人でショップに行った母は女性店員さんの説明が早口で聞き取れず、結局何も出来ずに帰ってくることになってしまいました。難聴の母にとっては、高い音は聞き取りにくく、さらに早口だったため、余計理解しづらかったようです。この話を聞いて、私が店員だったら、ゆっくり説明するか、文字を紙に書いて説明してあげられるようにしたいと思いました。

他に、今母が困っているのは、椅子から立ちあがったときや階段を下っているときにふらついてうまく歩けないことです。これは三半規管が壊れている事と、低血圧が原因だそうです。主治医からは、できるだけゆっくり歩くようにと言われていますが、駅や公共施設など人込みの中では、迷惑そうな顔をされたり、ぶつけられたりしてつらい思いをしているようです。見た目では障害が

わかりにくいので、周囲には理解されにくいのでしょう。

もしも、そういう障害者にであったら私も他の人と同じように迷惑そうにしてしまうかもしれません。しかし、母が事故にあってから、少し見方を変えてみようと思いました。障害の種類や、その人の性格によって周囲に求めることは違います。困っている人を見たら、その人に直接「なにかお手伝いできることはありますか。」と聞いてみるのがいいと思いました。

今でも母は、時々言葉を思い出せないことがあります。そういう時は、家族みんなでヒントを出して、クイズ番組のように楽しみます。また、言葉を言い間違えた時はみんなで大爆笑します。つまり、母の障害は個性だと思い、ポジティブに受け入れて暮らしていきます。

入院当初は、もう仕事はできないし日常の生活すらできないと言われていましたが、家族みんなで協力し合い、家に戻ってくることができました。さらには、障害を理解し、母の働きたいという気持ちをくんで受け入れてくれた会社があり、母はそこに就職することができました。

人権とは、人が生まれた時から持っている権利のことです。世の中には母のような障害を持った人が大勢いると思います。見ためでは分かりませんが、つらい思いをしている人もいます。そういった人たちの権利を守るためには、迷惑そうな顔をしてピリピリした世の中ではなく、ひとつひとつの言動に注意して、穏やかな社会をつくるのが大切です。そうすることで、障害を持った人々も障害を持っていない人々も過ごしやすい国になると思います。私は日本、また世界を、そのように変えていきたいと思っています。

優秀賞

人とのかかわり

府中市立府中第三中学校 二年

ますやま か の ん
増山 花音

2016年7月26日。この日は障害者福祉施設で発生した刃物による殺傷事件が起きた日だ。同日中に19人の死亡が確認され26人の人たちが重軽傷を負った、とても痛ましく、恐ろしい事件だ。そして、この事件によって私が最も恐れていた事が現実になってしまったのだ。

私は生まれつき足が悪く、どんどん学年が上がるごとにそれは悪化していった。だから私は常日頃から車いすを利用しているのだ。そして前に記した、私が最も恐れていた事とは「障害者はいらないと思われているのではないか。」という事だ。時々頭をよぎっていたのだが、そのことに目を向けたくなく、今までは深く考えたことはなかった。だから、今回の事件で衝撃を受けたのだろう。とくに衝撃だったのは、被疑者が放ったこの言葉。

「税金の無駄遣い。」

これには恐怖を乗り越え、さすがに悲しくなった。とても悲しかった。障害者はそんなに悪いのかと。とてもむごい言葉だった。被害者の方たちやその遺族の方たち。悲しかったと思う。遺族の方ももちろん被害者の方たちのことを思うとやりきれなくなる。どんな気持ちだったのか、考えるだけでつらい。そして、その被害者の恐怖がよりよくわかるものがある。

被害にあい助かった人の中に、病院で無事に助かり人工呼吸器を外された時、看護師に何度も「助けて」と繰り返していたそうだ。そして犯人が逮捕されたことを知ると「生き返った」と答えたのだそう。とても怖かったのだと思う。きっと私の想像以上の恐ろしさだったのだろう。もうこれ以上現実をみたくないと思っていたが、私はまたも世の中の現実を目の当たりにすることになる。

事件が起こった当日や次の日くらいからインターネットなどの掲示板やコメント欄などに事件のことがたくさん書かれるようになっていた。そこには私の意見と似た

ような意見や事件の犯行を否定するような意見などが大多数だった。だが、ちらほらと、事件の犯行を肯定する意見や賛同する意見、被疑者の気持ちも分かるなどといった意見もみられた。

これには私は世の中が信じられなくなった。私は、こんなにも事件に賛同する人がいるなんて思ってもみなかった。もちろんそういう人たちがばかりということではないが、そういう意見があるのは事実だった。私は、自分にあるもののことを障害ではなく個性だと思い続けてきた。だが、それではだめなのか。意見の中には、障害者に対する偏見のようなものもあった。世の中がどうしても信じられなくなってしまう。その時、私はこう思った。今のこの世の中を生きにくいと感じてしまい死んでしまいたいと思ってしまう人も出てくるのではないかと。本当は死にたくないはずなのにそう思ってしまう。そして「税金の無駄遣い」という言葉で追い打ちをかけられ生きる意味を見失ってしまうのではと思った。私たちは時に、生きるという選択肢も奪われてしまう。とても苦

しい。

だが、私にも譲れない意見がある。それは

「健全者と障害者とでは何が違うのか。何か違うところがあるのか。この世に完璧な人間なんていないのに。」
ということ。私は、この意見をたくさんの人に知ってほしい。人と人との間に壁はない。それがたとえどんな時であろうとも。私たちのそういう思いを分かってほしいのだ。

私は今まで、障害者だからという理由でいじめられたことは一度もない。恵まれているのかもしれない。だから甘い考えで生きてきて、今回の事件で初めて現実というものに気がついたのだろう。そして私は今も恵まれている。私の周りにいる人たちに頼ることができるからだ。あまりピンとこない人もいるかもしれないが、頼ることができるというのは相手が信頼できる人という証拠。だから私の周りにそういう人がたくさんいるのは、とても幸せなことなのだ。そして、私の周りの人たちも私のことを頼ってくれる。これは本当に嬉しい。だから、こう

ということが当たり前前の世の中をつくりたい。信頼してくれる人もたくさんいる。そういう環境をつくって、私のような人もそれ以外の人もみんなが暮らしやすいと思える世の中にしていきたい。

私の想像ではあるが今が私の言ったような環境であったとしたら、今回のような事件も起きなかったのかもしれない。今回のような事件が再び起きないように、私たちができるのは人とのかかわりあいを大切にし、人と人との間の壁をなくしていくことなのではないだろうか。

人は、一人では生きていくことはできない。私は常にその考えをもち、日々負けずに進んでいきたい。

優秀賞

誰にだってあること

国分寺市立第四中学校 二年

ながお すずか
長尾 涼花

私が通っていた小学校には特別支援学級がある。私が小学5年生だったある日、その特別支援学級の生徒が普通学級に体験に来ることになった。

彼は、それからしばらく私達の班と一緒に行動することになった。彼は、不完全を許せなくて完璧しか受け入れられない性格だった。ある日算数の時間にこんなことがあった。先生に当てられた彼が言った答えが間違っていたのだ。すると彼は、机に頭を打ちついたり、廊下に出て泣きながら床を転げ回ったりした。先生は答えを間違えたことに対して怒ったわけではなく、見ている私達も決して笑ったり馬鹿にしたりしたわけではない。私達にとってはよくあることなのに、彼が私達の予想を超える大きな反応をしたことに、少し驚いてしまった。悲しいのか悔しいのか恥ずかしいのか。私にとっては些細な

ことなのに、これ程大きな感情を持つことと、人目を気にせずそれを表現することが、彼の特徴なのだと感じた。またある日、教室で使っている机の脚の長さがそろわず、ガタガタしてしまうことが、彼は気になって仕方がないようだった。「ガタガタする。ガタガタする。」と授業の内容も耳に入っていない程、そのことで頭がいっぱいになってしまっていた。そんな私達が戸惑ってしまうような個性がある一方で、私達がとても感心してしまう面も彼は併せ持っていた。給食の時間、私が「この西瓜、美味しいね。」と話しかけると、彼は「西瓜の生産量は熊本県が日本一ですね。」と教えてくれた。そんな風に私達との何気ない雑談の中で折々につけ、ジャンルを問わず幅広いエピソードを披露してくれた。（学校で習っていないのになんで知っているんだろう。たくさん本を読んでいるのかな。）私は彼の魅力的なところを知ることができて少し嬉しくなった。

そんな彼のことを私は家族に話してみたくなった。

「特別支援学級から来た子が、私達の班と一緒に生活し

ているんだよ。彼は、とても頭がよくて知識が豊富なんだよ。雑談しているとき、私達に色々なことを教えてくれるんだ。」すると私の弟が勘違いして私に尋ねた。

「あれ。お姉ちゃんって特別支援学級に通っているの。」私は瞬間的にこう叫んでいた。「ひどい。何でそんなこと言うの。私は違うよ。」思わず言ってしまった自分の言葉に対して、その次の瞬間、心の中に自分でも説明できない重苦しい何かが宿った。すると母が、私の心を見透かしたかのように、とても悲しそうな目で言った。

「すずちゃん、何でそんなことを言うの。その子のことを初めは誉めていたけれど、同じだって言われたらそんなに強く否定するなんて。誉めていたのは、純粹に誉めていたのではなくて、優越感からだったのかなあ。すずちゃんとその子は何が違うの。」それで、私の心の中に宿った重苦しいものの正体が母の言葉によって分かってきたような気がした。しかし私は自分の心の中に宿った重苦しいものを母に伝えられる程整理できていなかった。私が口ごもっていると母が尋ねた。「その子はどうして

特別支援学級に通っているのかなあ。」私は、私達にとって些細に感じることもそのことで頭がいっぱいになってしまうからだ、と答えた。母は、「それじゃ、すすちゃんにも同じようなことがないの。」と聞いた。あらためて自分のことを考えてみると、私はノートなどがきれいに書けないとイライラしてしまう。納得いくまで何度も消してやり直してしまうのだ。また、私は虫が苦手である。虫が好きで飼っている人から見たら、虫が怖いという感覚は理解し難いと感じるだろう。

私にも他の人から見たら「自分とは違うな。」「なんであんなところにこだわるのだろう。」という部分があり、きっと誰にでもあるのだ。母は、「その子は感覚の違いが大きいため、落ちついて授業が受けられるように特別支援学級に通っているの。感覚や発達が違うことを発達アンバランス症候群というのよ。」と教えてくれた。

私は特別支援学級に対して偏見を持ってしまっていた。差別や偏見はどうして起こるのだろうか。自分とは違う、理解し難いと感じたところから始まるのではないか。し

かし、程度の大小はあれ、誰にでも個性が突出している部分はある。私は、差別や偏見は悪いことだ、と思っていた。差別や偏見から起きる悲しい事件を見聞きするたびに、私は絶対差別や偏見を持たず平等な人になる、と思っていた。しかし、無意識のうちに偏見の芽が私の心の中にあることに気づき、愕然とした。

先日、「ダイバーシティ」という言葉を知った。外国人や高齢者、障がい者など、少数派の意見を大切にすることが、その集団を柔軟で強くすることなのだそう。多様な人の多様な考えを大切にすると、自分も相手も幸せになれるのだ。私は、自分とは違うものも受け入れる、柔軟で優しく、強い人になりたい。

優秀賞

不完全で当たり前

おおさわ学園三鷹市立第七中学校 二年

やました かりん
山下 果倫

「脊柱側弯症です。」

病院でこう伝えられた時、私は頭の中が真っ白になった後、真っ黒になりました。背骨が曲がる病気で、完全に治ることは無いということ、進行すれば心臓を圧迫する恐れがあること、そうなったら手術をしなければいけないこと。レポートを読んでいるような淡々とした説明が、私の不安を大きく膨らませました。

進行を食い止められる方法は、コルセットをつけることです。プラスチックの板を身体に沿わせ、絞めつける器具です。しかも、運動時と入浴時以外、基本的にずっとつけていなくてははいけません。しかし私は、そんな大変なことが自分の身体に起きているという実感が沸かず、他人事のように感じていました。

でも、その間に様々な準備が進み、コルセットを試し

につけてみる日が来ました。その時、あまりの痛さに私は泣きました。何故こんな病気になってしまったのか、どうして私がこんな目に遭わなければいけないのか、訳が分からない。叫びたいけれど、コルセットのせいで息が深く吸えず、どうすることもできませんでした。

家で両親が、コルセットについて調べてくれました。そこには「コルセットはフランス貴族が自分を細く見せる為に身体を絞めつけたのが始まりで、現在は医療に應用されている」などとありましたが、私はコルセットを生み出したフランス貴族を恨みました。

ある日、母が新聞を持ってきて、「投書欄を読んでごらん」と言いました。そこには、同じく脊柱側弯症で同年代の子の投稿が掲載されていました。母は言いました。「貴女だけじゃない。同じ病気に苦しんでいる人はたくさんいるよ。今頑張れば、食い止められるから、乗り越えて。大変だけれど、この人はそれでも、戦っているんだよ。」

それでも私は納得できずに、父に不満を漏らしました。

「私は病気でコルセットをつけなければならない。だから、動きが制限されるし、時間がかかることもあるよね。それって、他の人に比べて不利なことだと思う。」

すると、父から返ってきたのは、慰めではなく叱責でした。

「何を言っているんだ。世の中には、歩けないので車いすを使う人や、目が見えないので盲導犬と暮らす人や、そのほかにも障害を持っている人たちがたくさんいる。しかも、それは治らないことのほうが多いんだ。そんな人でも、仕事を見つけて頑張っている。甘えたことを言っていないでしっかり受け入れなさい。」

そして、父は人類最速と言われるジャマイカの陸上競技選手のことを教えてくれました。

ウサイン・ボルト選手。彼はリオデジャネイロオリンピックで3大会連続2冠制覇を達成し、注目を浴びました。しかし、そんな彼も、私と同じ脊柱側弯症を先天性に患っていたのです。彼はそれによって腰などが痛むことがありましたが、走るときには逆に強力な推進力を得

ることで最速になりました。

私は恥ずかしくなりました。世の中には同じ病気でも活躍している人が大勢います。でも私は、「何故私だけ」と勝手に悲観していました。これからは弱音を吐くのは止めようと思いました。

私は、障害は不平等なものだとは思いません。そもそも、体のどこにも一つも異常が無い完璧に健全な人などいないのです。皆、何か足りないのです。それを「自分たちと違う」と馬鹿にしたり、差別したりするのはおかしいです。自分もどこかが欠けているということを忘れてはいけません。

私のまわりには、コルセットや側弯症のことを嘲るような人はいません。私のために協力してくれる人のお陰で、今日も元気に笑っていられます。本当に幸せです。

セキチュウソクワンショウなんて知らない人のほうが多いと思います。私も、自分になる前はそうでした。でも、何か困っているような人がいたら、そっと手を差し伸べてあげられるような人になりたいと思います。それ

だけでその人は救われます。微笑むことができます。一人ひとりが不完全で当たり前だからこそ、皆で完全を目指しましょう。

障害の有無に拘らず、誰もが当たり前前に夢を見られる世界の為に。

優秀賞

知らずに生まれる「差別」

西東京市立田無第三中学校 三年

すみやしき えさと
角屋敷 絵里

小学生の頃、私の通っていた小学校には、「わかば組」という特別支援学級があった。わかば組の子たちの中には、感情をコントロールするのが難しかったり、すらすらと話すことが苦手だったりする子たちがいる。教室が離れていて会う機会は少なかったが、学校行事があるときには一緒に過ごすことが多かった。特に6年生を送る会では、わかば組の子たちがハンドベルで演奏をしてくれていた。しかし同級生の中には、「おかしい」とクスクス笑って馬鹿にする人もいた。私もそれに対して何も言えずにいた。自分は何も言っていないから、と他人事のように思っていたのだ。障害のない私たちが普通だと思っていた。考えてみると、この思い込みもわかば組に対しての差別だった。いじめを外から見ている傍観者と同じように、関係ないという意識をもっていた。そして

私は知らぬうちに、「おかしい」と笑う人と同じことをしていた。

この考えが間違っていると気付いたのは小学3年生になってすぐの頃だった。兄が軽度の知的障害で、来年は特別支援学校へ進学するというのを母親から聞いた。私は、とても驚いた。今まで一緒に過ごした中で、兄に障害があると感じたことが全く無かったからだ。母には「今まで通りに接してね。」と言われたが、余計に意識をしてしまい、話せなかった。私の兄は知的障害者なので外見で判断されたり、一緒にいて嫌な思いをしたことは無かったが、友人などと兄弟の話をするときは、兄のことについて聞かれないか、と毎度ドキドキしていた。馬鹿にされない、と信じていても、障害があると友人に言うことはできなかった。しかし、母の言っていた通り、兄は今までと何も変わらなかった。大好きな歴史のことは本当に詳しく、私が知らないたくさんを教えてくださいました。他にも食器洗いや炊飯などの家事を自ら進んでやってくれて、いつもと変わらず兄は優しかった。そし

て、兄の障害について意識するようになり、わかば組の子たちを、障害者であるというだけで自分たちとは違うと知らん顔をしていたことを深く後悔した。

兄が特別支援学校に通うようになってから家族で学校に行くことが多かった。文化祭や体育祭を見に行くと、兄よりも重い障害をもっている人をたくさん見かけた。そんな中で気が付いたことは、この場所にいる全ての人がいきいきとして楽しそうに生活をしているということ。教室で受付をしていた生徒は、「ありがとう」と笑顔であいさつをしてくれた。後で聞くと、兄のクラスメイトだったらしく、私が妹だと知って声をかけてくれたという。まるで、面倒を見てくれている兄弟のようで、少し緊張していた気持ちも自然とほぐれていた。この人だけでなく、通りすがりで多くの生徒があいさつをしてくれた。学校に来る前、特別支援学校という場所はもう少し静かで、重々しい雰囲気だと思っていた。しかし、生徒によるダンス発表の様子を体育館で見たときも、生徒は全員笑顔で踊っている。発表を見守るお客さんの顔にも

「かわいそう」と思っているような表情は浮かんでいない。この光景に私は驚いたが、これが本当にあるべき光景なんだと感じた。同時に、「今まで自分は障害者の人たちをかわいそうだと思っていなかったか。」と思い返した。無意識にかわいそうだと思うことで自分と障害者の間に壁をつくっていた。障害者の中にはかわいそうだと思われるのが一番辛いという人もいる。だからこそ、私たちは怖がらずに自分から声をかけようという意欲を見せることが重要である。しかし、障害者の人の立場を立て、相手よりも下の立場になって話をするわけではない。もちろん、自分の方が上という考えも間違っている。あくまで自然に、普段友人と話すように気を払って接するのが大切である。特別支援学校に行けたことで、私はそう気付くことができた。

今、自分が誰かを差別しているという意識がある人はほとんどいないだろう。しかし、障害者に対して「うるさい」「怖い」と思ったことはないだろうか。出来れば関わりたくないと避ける気持ちはないだろうか。これは

差別で、あれは差別ではない、という明確な決めごとが無い
ため、差別の意識はどんどんと薄れてきている。暴力を
したり、酷い言葉を投げつけたりしていなければ正しい、
ということはない。障害者だというだけで馬鹿にすることは、
暴力に値する行為だ。そして、私たちが知らず知らずの内に
作りあげる壁に傷ついている人がいる。この壁は、私たちが
怖がらずに障害者の人と関わろうとすることで埋めることが
できる。だから私は、特別支援学校で会った生徒のように、
ごく自然に接していきたい。人権を守ることは、自分自身の
意識ひとつで、実行できると私は思う。

優秀賞

よりよい社会になるために

青梅市立第一中学校 一年

よしだ かのん
吉田 佳暖

私には、小学生の時から不思議に思っていることがあります。

それは「どうして男子には更衣室がないの？」ということ。女子は女子更衣室で着替え、男子は教室で着替えていました。教室ですから、自由に女子が入り出できる環境で、時々恥ずかしそうにしている男子もいました。そんな時決まって女子から「なに恥ずかしがってるの。男でしょ。男だからいいじゃない。」という声があがっていました。私はいつも「それは違う」と少し腹立たしく感じていました。だって立場が逆ならきっと大騒ぎするでしょう。男の子だってパンツを見られたら絶対恥ずかしいはず。それに、教室は教室であって更衣室ではない。女子更衣室があるなら平等に男子更衣室があってもいいはず。ですが、中学校でも「男子更衣

室」は存在しません。

またこんなこともありました。

私の住んでいる地域では、毎年9月に神社の子ども奉納相撲があります。昔から続く伝統的な神事です。夏休みの一ヵ月間ほとんど毎日のように相撲の練習があつて、大人も子どもも真剣に行事に取り組みます。しかし、これは男の子しか参加が許されていません。ピリピリと張りつめた空気感、熱気溢れる応援。まだ小さかった私は、実はあの場に身を置いて相撲をしてみたかったのです。でも女の子は土俵の周りをちょろちょろするだけで怒られます。「もしも土俵に上ったりしたら神様の怒りに触れてケガ人が出る」と地域のおじさんから教えられました。昔から神聖な場所には女性は近寄れないと言いますが、「じゃあ女って何者なんだろう？」と子どもながらに何とも言いようのない悲しみを覚えました。

さて、このようにざっと身の回りを見渡してもごく当たり前に男女の扱いの差は存在しています。現代の社会では男尊女卑は勿論のこと女尊男卑という言葉で様々な

問題が報道されているのを見かけます。特に雇用における差別問題は、将来をイメージするうえでとても関心があります。「男は強い、女は弱い」という身体的差のイメージが先行して、男性が有利になったり時には女性が有利になったりしているなど感じています。

日本では昔から「男は外で働き女は家を守る」という考え方がある中で、社会の一員として活躍したい女性の社会進出が妨げられてきました。私の母も私を身ごもった時、会社から今で言う「マタニティーハラスメント」を受けたそうです。驚いたことにそういった問題はそのずっと以前からあり、現代でも無くなっていません。

性別の違いで不当な扱いをしない、されない社会になるためにはどうしたら良いのでしょうか。

七月末、東京都に新しい女性都知事が誕生しました。私には政治のリーダーは男性というイメージがあったため、とても衝撃を受けました。そしてこう感じました。

「男だから女だからではないんだ。その人の持つ能力を適材適所、正しい枠にあてたら、きつともっとよりよい

社会になっていくのではないか。そういう希望をもって大人たちは新しいリーダーを選んだんだ。」

私達は性別で人を見るのではなく、一人の人間として互いの個性・特徴を正しく理解し、尊重し合うことが必要です。男と女の身体的な差をプラマイゼロにするのは不可能ですが、個人の活躍が性別で妨げられる社会であってはならないと思います。私はこれからもずっとこのことを念頭に置いて、自分らしく生きていきたいと思えます。